

# **【資料】 女子大学生における基本的居場所感の検討**

**浅井美帆**

金城学院大学大学院人間生活学研究科博士課程前期課程

## **Sense of Ibasho in Japanese Female University Students**

**Miho Asai**

Graduate School of Human Ecology, Kinjo Gakuin University

Keywords: sense of Ibasho (居場所感), scale (尺度), female university students (女子大学生)

## 1. 問題と目的

近年、不登校やいじめの問題が増加しているなかで、学校適応と「心の居場所」の関連性が示唆されている。1992年には、文部省学校不適応対策調査研究協力者会議が「登校拒否（不登校）問題について一児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して一」という報告を出し、学校内の「心の居場所づくり」の必要性や重要性を指摘している。また、学校内の問題に限らず、社会の中に適切な自分の「居場所」を見いだすことが、人々にとって切実な課題となっているといえる。

青年期における「居場所」に関する研究では、田島（2000）が、高校生、大学生を対象に、「居場所」と抑うつ感との関連を検討しており、「居場所」がある人は自分に対する肯定感がより強く、「居場所」がない人は、自分に対して否定的で、抑うつ感が高いことが示されている。このように、「居場所」とメンタルヘルスには関連があることが示唆されており、メンタルヘルスをより良く保つためには、自分自身にとって適切な「居場所」をもつことが重要である。

「居場所」という言葉は本来物理的な場所を示していたが、今や心理的意味合いも強く含まれているものとして理解されるようになり、心理臨床場面でも多く使われるようになってきた。心理学研究の中でも「居場所」という言葉の心理的意味づけが多くなされているが、居場所の定義は研究者にとってさまざまである。その中でも、石本（2010）は、臨床心理学研究においては、「居場所」とは、「ありのまま受け入れられること」であると定義するものが多いとしており、「居場所」は「ありのままにいられるところ」という一定の共通理解が得られつつあると述べている。則定（2007）は、居場所感が「ありのままの自分を受け入れられている」といった「被受容感」の他に、「自分らしくいられる」といった「本来感」、 「役に立っている」といった「役割感」、 「落ち着く」といった「安心感」の4概念から成ると示唆している。そして、個人の居場所感を検討するため、上記の4概念を測定する4因子から成る青年版心理的居場所感尺度を作成している。さらに、則定

（2008）は、この尺度を活用し、居場所感の発達的な変化を検討している。

則定（2007）の青年版心理的居場所感尺度は、特定の重要な他者に対する心理的居場所感を求めるものであった。一方で、先行研究では、「居場所」は他者との関係性から生じる場所だけでなく、例えば「自分の部屋」など、他者とかかわることの少ない場所を選ぶ者も多いとされている。このことから、居場所感というのは特定の他者とかかわりの中で感じるものだけでなく、より一般的な状況に対しても感じるものであると考えられる。

そこで本研究では、女子大学生を対象に、則定（2007）の尺度をもとに、個々人が感じる基本的な居場所感を測るための尺度を作成することを目的とする。

## 2. 方法

女子大学生98名を調査対象とした。大学1～4年生を対象とした心理学に関する授業の中で、一斉に質問紙調査を実施した。回答にあたっては、プライバシーが保護されること、調査以外に使用されることがないことが紙面上と口頭で教示された。

個々人が感じる基本的な居場所感を測るために尺度を作成した。則定（2007）が作成した、青年版心理的居場所感尺度20項目をもとに、特定の人物を当てはめて回答を求める形式から、基本的な居場所感について尋ねる形式に変更した。具体的には、「○○と一緒にいると、ありのままの自分を表現できる」という項目は、「ありのままの自分を表現できる居場所がある」に変更した。

評定は、「全くあてはまらない（1点）」から「非常にあてはまる（5点）」までの5件法であった。

## 3. 結果

データに欠損があったものなどを除き、96名分の回答を分析対象とした。96の回答を対象に因子分析（最尤法、プロマックス回転）を実施し、固有値の減衰状況および解釈の可能性から、1因子構造が妥当であると判断された。この結果をもとに、全

Table 1. 女子大学生における基本的居場所感尺度の因子構造

項目番号	項目内容	因子負荷量
第1因子	「基本的居場所感」 $\alpha = .98$	
20	一緒にいると、くつろげる人がいる	0.94
19	一緒にいると、居心地がいい人がいる	0.93
18	一緒にいると、安心する人がいる	0.92
13	無条件に受け入れてくれる人がいる	0.91
16	必要としてくれる人がいる	0.90
15	一緒にいると、ここにいていいのだと感じる人がいる	0.89
6	誰かの支えになっている	0.89
9	誰かのためにできることがある	0.88
12	私を大切にしてくれる人がいる	0.88
14	いつでも私を受け入れてくれる人がいる	0.87
7	誰かから頼りにされている	0.85
4	心から泣いたり笑ったりできる居場所がある	0.81
17	一緒にいると、ホッとする人がいる	0.76
5	誰かの役に立っている	0.75
10	誰かと一緒にいると、自分のことをかけがえのない人間なのだと感	0.72
11	無条件に愛してくれる人がいる	0.71
1	ありのままの自分を表現できる居場所がある	0.71
8	誰かに対して、自分にしかできない役割がある	0.63
2	ありのままの自分でいいのだと感じる居場所がある	0.62
3	自分らしくいられる居場所がある	0.57

20項目、1因子から成る質問紙尺度「女子大学生における基本的居場所感尺度」が作成された。尺度の信頼性を検討するため、因子の $\alpha$ 係数を求めた。その結果、一定の信頼性が認められた（第1因子「居場所感」( $\alpha = .98$ )）。女子大学生における居場所感尺度の因子構造をTable 1に示した。

#### 4. 考察

本研究では、則定（2007）が作成した、青年版心理的居場所感尺度20項目に修正を加え、新たに女子大学生における基本的居場所感尺度を作成した。則定（2007）の青年版心理的居場所感尺度は、「〇〇と一緒にいると、ありのままの自分を表現できる」といったように、〇〇の部分に父親、母親、親友という特定の人物を当てはめて答えを求める質問項目から構成されており、重要な他者に対する居場所感を測定するために幅広く活用できるものである。本研究では、この青年版心理的居場所感尺度をもとに、特定の人物に対する居場所感だけではなく、女子大学生を対象に、個々人が感じる基本的な居場所感を測るため、上記のように人物を特定するような質問項目を「ありのままの自分を表現できる居場所があ

る」といったように、基本的な居場所感を問う内容に変更した。

因子分析の結果、1因子構造が妥当であると判断された。なお、則定（2007）の青年版心理的居場所感尺度は4因子構造であった。質問項目の数や内容の大幅な変更はしていないが、このような違いが出たことにはいくつかの理由があると考えられる。まず、則定（2007）の青年版心理的居場所感尺度は特定の人物を当てはめ答えていく質問項目であるが、本研究では特定の誰かではなく、基本的な居場所感を尋ねる質問項目であるという違いが影響を与えていると考えられる。さらに、先行研究では特定の人物を当てはめるため、その人の役割が明確になるが、本研究では基本的な居場所感を測るため、回答する側が項目によっていろいろな人を想定したと考えられる。また、女子大学生における基本的居場所感尺度は青年版心理的居場所感にはなかった、「ありのままの自分を表現できる居場所がある」といったように、人ではなく場所をイメージさせて回答を求める質問項目が4項目あり、この点も因子構造の違いに影響を与えるのではないかと考えられる。

本尺度では、女子大学生を対象とした基本的な居場所感を測定していることが特徴であるが、このよ

うに、自分らしくいられる場所があるかどうか、居場所感の中で一つの重要な役割を果たしていることは興味深い。この点は、女子大学生に特有な心理的特性である可能性もあるため、今後の検討課題の一つとしたい。

また、女子大学生における基本的居場所感尺度の信頼性を検討するため、 $\alpha$ 係数を算出した。その結果、十分に高い値が認められ、一定の信頼性が認められた。このことから、本尺度は、女子大学生の基本的な居場所感を測定するための尺度として今後の活用が可能であると考えられる。本尺度を利用して、他の心理的特性などの関連を検討していきたい。

#### 引用文献

石本雄真 2010 青年期の居場所感が心理的適応、

学校適応に与える影響 発達心理学研究, 21, 278-286.

田島彩子 2000 青年期のこころの「居場所」—「居場所」感覚と抑うつ感— 日本心理臨床学会第19回大会発表論文集, 258.

則定百合子 2007 青年版心理的居場所感尺度の作成 日本教育心理学会第49回大会発表論文集, 334.

則定百合子 2008 青年期における心理的居場所感の発達的变化 カウンセリング研究, 41, 64-72.

文部省 1992 登校拒否（不登校）問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して（学校不適応対策調査研究協力者会議報告）教育委員会会報, 44, 25-29.